楊棟梁 教授/杨栋梁 教授
南開大学日本研究院 元院長/南开大学日本研究院 原院长
南開大学世界近現代史研究センター 主任/南开大学世界近现代史研究中心 主任

日　時　：2022 年 2 月 27 日
場　所　：南開大学日本研究院
使用言語：日本語
聞き手　：野口裕子
（国際交流基金北京日本文化センター）

时　间　：2022 年 2 月 27 日
地　点　：南开大学日本研究院
使用语言：中文
采访者　：野口裕子
（北京日本文化中心（日本国际交流基金会））

【目次】

１．日本との出会いから現在まで
(1)農村から南開大学へ
(2)日本語の学習
(3)日本留学の思い出
(4)日本の研究者との学問的な関わりなど
２．研究について
(1)南開大学日本研究院
(2)中国日本史学会
(3)次世代研究者へのメッセージ

【目录】

1.从与日本的相遇到现在
（1）从农村到南开大学
（2）日语学习
（3）日本留学回忆
（4）与日本学者的学术交流
2.关于研究
（1）南开大学日本研究院
（2）中国日本史学会
（3）给下一代学者的寄语

複製・編集を禁じます
禁止复制编辑文稿内容

【本文】

１．日本との出会いから現在まで/从与日本的相遇到现在

(1)農村から南開大学へ/从农村到南开大学

私は遼寧省の黒山県という県に生まれ、ずっと 24 歳まで農村で暮らしました。家は広い平原の中のとても普通の農家で、私は 5 人きょうだいの 2 番目でした。私の中学時代は文革時代ですからあまり勉強をしませんでしたが、特に私の県では外国語の教育はありませんでした。その後、大学試験を受けて南開大学に入学してから、日本語を勉強することになります。

まだ村で働いていた 18 歳の頃、1972 年の日中国交正常化の時のことは印象深いです。まだ文革時代ですけれども、ラジオ放送を毎日聞きまして、政治学習をとてもよくやっていました。ですから国内政治や世界政治情勢などわりに知っていました。日中国交回復は大きいことですから、やはりとても嬉しく、いいことと、私自分だけじゃなくて一般の人々もそういうような感覚だったんじゃないかと思いますね。

後に歴史研究の道に入ったのはとても偶然なことです。私の大学入学試験の得点は県で 1 位か 2 位でした。黒山県の教育委員会のある方が、高い点数の学生はぜひいい大学に推薦したいということで、通信がとても不便な中、自ら私と連絡し、「南開大学の歴史は強いから、そちらに入学するのがいいんじゃないですか」と勧めてくれました。私は南開大学がどこにあるかも知りませんでしたが、とにかく天津にあるいい大学ということで、「じゃあ、そうしましょう」と。

1978 年の日中平和友好条約の締結は、南開大学からの入学通知書もいただいて、もうすぐ大学に入るという時でした。その時は、中日関係はとてもいい雰囲気でした。また中国は、改革開放の方向に進んでいるところです。ですから、全中国の人民は、文化大革命はもう終わりまして、世界に向けてぜひ今度こそ中国の発展を一生懸命に進めていこうと、みんなそういうような気持でしたから、中日平和友好の締結で、これからもっと日本の協力を受けていい方向に行きたいと、そういう気持ちでしたね。

大学に入ると、ほかの同級生はみな英語がペラペラでした。私は英語を勉強していなかったので代わりに数学の試験を受けて入学したのですが、大学に入ってから世界史の専攻ですから外国語を勉強しなければなりません。世界歴史学科の 1 クラス 30 名の中で英語ができなかったのはわずか 4 人、この 4 人は英語ではなく日本語を勉強しましょうということになりました。日本語の勉強をすれば必ず日本史の研究をしますね。そういうとても偶然な、自分の選択というより時代の選択ですね。

私はそれをきっかけにして日本語を一生懸命に勉強しました。その時代は大学に入るチャンスは非常に少ないですよ。もし大学に入らなければ、特に私など、きっと、死ぬまで農村で働いていたでしょう。でもそうではなく、改革の機運に乗って、夢のように大学で勉強する機会を得ましたので、ぜひとも一生懸命に勉強して、自分の出世のためではなく国の発展のために、自分は国に何か貢献する、そのような気持ちで本当に勉強しました。

(2)日本語の学習/日语学习

復製・編集を禁じます
禁止复制编辑文稿内容

日本語を教えてくださったのは、南開大学外国語学院の于燕という、大連外国語学院出身で私より 1、2 歳年上の若い女性の先生でした。その時の中国の東北地域や華北地域では、若い日本語の先生はそんなに珍しくないと思います。とても責任感を持って教えてくれたんです。大学時代 4 年間ずっと、于先生に教わりました。

また、南開大学で外国語学部に次いで外国語のレベルが高かったのは世界歴史学科でした。一週間のうち半分ぐらいの時間は外国語学習のために使いました。

大学を卒業してからすぐに南開大学で教師として勤めるようになりました。学部出身で教師になることはとても珍しく、能力がまだ弱いことを自分は知っていますので、仕事をしながら、日本語も、大学時代のように一生懸命に勉強しました。

1985 年か 86 年ごろ、日本のどこかの県の教育委員会の派遣で、橋本先生という女性の先生が日本語学部に来られました。橋本先生自身は先生ですけれども、中国に来る身分はボランティアで、その先生が私に 1 年ぐらいボランティアで、ヒアリングや会話を教えてくださいました。

またもう一人は田辺信治先生です。戦前は小学校の先生でしたが、戦争が起こって兵士として中国に派遣されました。敗戦後は日本の職場で働かれ、定年してから、今度は中日友好のため全部自費で、南開大学で先生に日本語を教えてくれました。1989 年まで 3 年間ぐらい、南開大学の先生に日本語を教えました。ですから、南開大学のわりに若くて日本語のできる先生は、ほとんど田辺先生の教育を受けました。その二人の先生は、とても印象が深いです。とてもやさしくて。

日本語の学習ではもう一つ印象深いことがあります。大学に勤めて最初の年に、学部からの指名によって、富永健一先生の『経済社会学』[i]という本を翻訳したことです。1982 年まで中国の大学には社会学部はなかったので、南開大学社会学部が中国の第一号の社会学部をスタートした時は、教科書がありませ

んでした。そこで外国の教科書を参考にして学生を教えましょういうことになって、そのなかにあった日本の富永先生主編の『経済社会学』という本の翻訳を私は担当しました。丸々10 カ月間、毎日、14、5 時間ぐらい翻訳しまして。とても難しい本でしたが、これを一つやりまして、特に読む力に自信がつきました。

(3)日本留学の思い出/日本留学回忆

初めて日本に行ったのは 1989 年の 4 月で、南開大学と愛知大学の交換教員として愛知大学経済学部に行き、自費で 1 年間延長して、合計 2 年間勉強しました。その時、私は在職の博士生でしたので、博士論文の準備はほとんどその時、愛知大学でしました。指導の先生は旗手勲先生と森久男先生でした。テーマは「日本戦後復興期経済政策研究」です。旗手先生をはじめとして愛知大学の諸先生の協力をいただいて完成しました。

いくつか忘れられない思い出があります。例えば、大学派遣の教員交換時間は 1 年間でしたが、1 年では博士論文の準備はできないので、自費でもう 1 年延長しました。自費ならば、アルバイトしなければ生活はできないでしょ。でもそれは…、やはりメンツありますよ、私は。大学の教員としてこちらに来ましたけれども、アルバイトをすれば、周りの人、特に日本の指導教授やとても親しくしてくださる先生たちはどういう風に私を見るでしょうね？それは困るでしょうね。愛知大学の先生はそういうことをとにかく理解してくれました。その時、愛知大学では『中日大辞典』の第 4 回目の編集をしていました。常に新しい単語字引に入れる作業が必要です。そして、その『大辞典』編集の責任者の今泉潤太郎先生が、どういうきっかけでか分かりませんけれども、私が困っていることをどこかから聞きまして、それで『大辞典編纂室』に来てくださいと。その先生は言語の先生ですよ。私は経済学部の研修生で、全然関係はないでしょう？でもやはり愛知大学は小さい大学だからかもしれません。あの時、中国の研修生は合わせて 4 名でした。そして私は、週二回、つまり 2 時間、『大辞典編纂室』に行って編集のことを手伝う。それで収入があると。それでもギリギリでしたが、それは私は感動しました。助けてくださったんですね。

もう一つは私の指導教授、旗手勲先生。2 年目のお正月か忘年会の時、いい雰囲気で、「乾杯！」とか。それで終わる時ですね、旗手先生が「じゃあ、楊さん」と（封筒を取り出して）。日本円のお金ですね。「あなたは今、お金がかかるから。」「いや、それは…。」私は受け取れないでしょう？そうしたら、旗手先生は（怒ったような表情で）「つまらん」と。じゃあ私はもう…（仕方なくありがたく頂きました）。後で考えると、もしかしたら大学からもらった私の指導料じゃないかと推測しますが。ほかにも思い出はいろいろあります。

その時の中日関係はとても良かったです。豊橋の市民は中国にとても親しくしてくれました。豊橋から戻って、「豊橋人」[ii]という文章を発表しました。豊橋の人との付き合いの思い出、そういう文章です。残念ながら今は、そういうような雰囲気はありませんが、あの時は本当に、何も考えずにできるとても自然な「普通の人間」の交流でした。

2 年目の時は、私の妻と小学校 3 年生の息子が来て、豊橋で半年間一緒に暮らしました。豊橋にいた時は、近所の子供たちがやってきて、窓の外で「遊ぼー」、「遊ぼー」と。私の息子、パッと飛んで行って、子供たちはどこに遊びに行ったか分からないけれども、行ったら半日帰ってこない。戻ったらポケットに飴とかいろいろ食べ物、あるいはおもちゃ、そういうものがいっぱい、そういう時代でしたよ。今はそ

復製・編集を禁じます
禁止复制编辑文稿内容

れは考えられないと思う。息子はその後、天津外国語大学を卒業してからすぐ名古屋大学に行きました。

(4)日本の研究者との学問的な関わりなど/与日本学者的学术交流

1993 年から 1994 年、国際交流基金の助成を受けて、ちょうど 1 年間、共同研究という形で、東京大学経済学部の石井寛治先生、原朗先生の指導を受けました。その 1 年間の研究のうちに交流の面は広がります。その二人の先生の関係で、もっとたくさんの学者と知り合いました。

また例えば青山学院大学の三和良一先生は、すごく親しいです。もう年配ですけど、ほとんど毎年 1 回こちらに来られます。

橋本寿朗先生に初めてお会いしたのは、実は私が東京大学に行く前です。1993 年に鄭励志先生の復旦大学日本研究センターのシンポジウムに参加しまして、そこで橋本先生と京都大学の伊東光晴先生にお会いしました。伊藤先生は鄭励志先生ととても親しいのですが、ご高齢になられたので、橋本先生に後をお願いしたいということで、橋本先生は必ず復旦大学のシンポジウムに参加されていました。その時の日本研究は、南は復旦大学、北は南開大学というように、この二つの大学は大変影響力がありました。そこで、私が 96 年に南開大学日本研究センターの責任者になってから、橋本先生は毎年南開に来てくださるようになりました。

ある年、橋本先生が国際交流基金の支援で南開大学に集中講義に来られた時、先生に謝金を手渡しで支払うわけですね。でも橋本先生は謝金を受け取られませんでした。渡そうとすると、「それは南開の方でまだいろいろお金がかかるところがあるから、使ってください」と、受け取ってくださいませんでした。

復製・編集を禁じます

橋本寿朗先生は私の 6 歳年上で、とても気が合ったんですね。研究分野も、橋本先生は大恐慌時代の日本経済、私は戦争期前後の日本経済と、近かったんです。橋本先生は頭の回転がすごく早くて努力家でした。私が南開大学日本研究センターの責任者だった時、国際交流基金からの第 1 期の 5 年間の援助がそろそろ終わるという時で、次の 5 年間の研究計画を提出しなければなりませんでした。良い計画を立てるかどうかが、次の 5 年間の援助に直接影響、影響がある訳ですから、何をすれば良いか、私はとても悩みました。当時、上海では、復旦大学日本研究センターが国際交流基金の援助で毎年 1 回シンポジウムを開いていまして、影響力があったんですね。それで南開大学もそのようにやりたいと思いました。それで、どんな特色があるシンポジウムをしようかと、橋本先生の研究室で一緒にずっと深夜まで考えました。その時は彼はもう東京大学から法政大学に移った後ですね。研究室のコンピューターの前で、南開大学の次の 5 年間研究計画、発展計画を一緒に、「これがいい」「あれがいい」と、私の助手みたいに日本語で手伝ってくれて、5 年間のシンポジウムのテーマを全部決めて、計画を作って国際交流基金に提出したんですね。

禁止転載編集文稿内容

でも彼は 2002 年に急に亡くなりました。私にとって一番ぐらいの損失じゃないかな、とても寂しいですね。

２．研究について/关于研究

(1)南開大学日本研究院/南开大学日本研究院

1988 年、南開大学日本研究センターができました。そのセンターは、南開大学の各学部の日本研究者を集めて一つの組織にしたもので、つまりメンバーはそれぞれ自分の所属が別にあります。例えば歴史

学部か、経済学部か、外国語学部か、そういうことですね。人事権、財務権全部無しという組織です。幸い、1992 年頃、最初に岡松慶久先生という京都の個人から 1 万ドルの寄贈をいただきまして、いろいろ活動ができるようになりました。

その後まもなく、国際交流基金からも華北の日本研究拠点に指定されまして、毎年、国際交流基金からいろいろの支援を受けるようになり、メンバーは積極性が高くなりました。あの時は中国はまだすごく貧乏だから、そういう援助あれば本当にありがたいことで、例えば共同研究、リサーチ、本の出版援助など、どれもとても魅力的でした。

でも私が 96 年にこのセンターの責任者になって間もなく気づきました。たくさんの事務的な仕事がありますけれども、よそに所属している研究者にとってはそれをやるモチベーションがないので、管理が難しいということです。そこで、メンバーの一部だけでもこのセンターの所属にする必要があると考え、2000 年に、私の所属していた日本史研究室の 10 名と事務担当と資料室担当各 1 名、合計 12 名の「戸籍」をセンターに移しました。2000 年から中国では大学改革が実施され、いくつかの「系」（注：「学科」に相当）と研究所を合併させて一つの「院」（注：「学部」に相当）になります。もともとは日本研究センターも歴史学院に合併される可能性がありました。それで私は、南開大学に対していろいろと工作を始めました。国際交流基金にも協力をお願いしました。まず、歴史学院に合併されてしまうと国際交流基金からの支援が危ぶまれると言いました（笑）。次に、日本研究は総合的に行い、研究人材を育てることが必要だと説得しました。これは成功し、2003 年に日本研究院となりました。合併の時代に、逆に独立しようというのはとても難しいことでしたが、成功しました。「院」として存在するという意味でも、歴史、経済、法学の 3 つの学位を授与できるという意味でも、中国の大学にある日本研究機関としては唯一です。

複製・編集を禁じます
禁止転載編集文稿内容

成功した背景は 2 つあります。一つに、伝統的に南開大学が日本の研究を重視しているということは確かに間違いないです。初代学長の張伯苓学長の時代は、中日関係は良くない時代でしたが、その時も南開大学の日本研究は中国の大学の中で活発で、そういう伝統があります。もう一つはもっと重要です。私の指導教授、呉廷璆（ご・ていきゅう）先生は、京都大学の歴史科を卒業された日本史研究で有名な先生で、新中国成立時のトップレベルの日本研究者の中の一人です。呉先生は 1949 年、新中国成立直後に武漢大学から南開大学に来まして、日本史研究者がどんどん育てられまして、私までで 14、5 名ぐらいの博士を育てまして、そういう日本史研究の伝統がありました。呉先生は中国日本史学会の初代会長です。

(2)中国日本史学会/中国日本史学会

（私が会長を務める）中国日本史学会は 1980 年に創立されました。中国の学会には国家級や地方級などいろいろな学会がありますが、これは中国の行政部に管理される国家級の学会です。メンバーは 400 人ぐらいです。時事的な日中関係とか政治とかから割合離れて学術研究を主にした学会です。年に最低 1 回、年会を開いています。以前は、学会で出版事業などもしていました。80 年代の時は初めて日本で、六興出版社から 13 種類の研究書を日本で発表したこともあります[iii]。今は主にシンポジウムや交流会などを行っています。

(3)次世代研究者へのメッセージ/给下一代学者的寄语

学術研究も、問題意識とか研究のやり方、交流の方式などは時代によって調整しなければいけない。しかし歴史学科出身の私の立場で言うなら、まず客観的研究、事実、これを大事にするということは何より重要なことで、この点は変わりません。これは一点目です。

二点目に、やはり将来は若者に属していて、先ほどの原則によって研究する若手研究者がいないと、中国の研究の将来性はありません。日本研究だけじゃなくて何の研究でもですね。だからまず、独立性を持って、自分の目で、自分の頭で、物事を判断できるようになるには、まずすごく苦労して基礎的な研究からやらなければいけない。学術研究ではそれを重視して、まず信念のところから樹立しなければならない。

三点目に人の交流です。国際交流基金は中日両国の文化交流、あるいは学術交流の懸け橋といえます。とても長い間大きな役割を果たしまして、多方面から交流を推進するためにいろいろな事業がありました。私も参加者の一人として思いますが、やはり人と人の交流を中心にしなければならない。他は全部その次です。20 世紀の 80 年代から末までの 20 年間には、国際交流基金のプロジェクトを利用して相当にたくさんの人的交流をしたんですね。あれは効果は高いですよ。例えば研究者の交流でも、ただ話を聞くだけじゃなくて、何か一つの共同研究とか一つのシンポジウムとか、一冊の本を書くとか、そういうことをすれば、必ず人の交流があるでしょう。やはり人を中心として、お金を、人の交流のために、人の協力のために、人と人との相互理解のために使う、それが重要ですね。人が会えば話はしやすいでしょう。直接会えないとだめです。それは一つの感想です。

公開：2023 年 2 月 28 日

複製・編集を禁じます
禁止复制编辑文稿内容

---

[i] 富永健一編『社会学講座 8　経済社会学』東京大学出版会、1974 年

[ii] 杨栋梁“丰桥人”田恒、唐景芸编《留日归来忆扶桑——留日归国学人纪念中日复交二十周年文集》社会科学文献出版社，1992 年

[iii] 沈仁安　他著『東アジアのなかの日本歴史』（全 13 巻）六興出版社、1988 年～